FAITH

キリスト教と仏教の共通の根拠（3）

一禅者からキリスト教徒への提言

スイス・ツークで開催された第1回キリスト教・仏教
対話集会における講演（1994年7月）より抜粋

秋月龍珉
あきづき・りょうみん
1921年、宮崎市生まれ。東京大学文学部哲学科卒業。同大学院修了。
花園大学教授・埼玉医科大学名誉教授・禅僧。
著書に、『秋月龍珉著作集』全15巻、『道元入門』『公案―実践的禅入門』『禅門の異流――休・正三・盤珪・良寛』『禅仏教とは何か』『世界の禅者―鈴木大拙の生涯』『正法眼蔵を読む』『新大乗―仏教のポストモダン』など多数。共著に八木誠一博士との宗教哲学討論集『親鸞とパウロ』『禅とイエス・キリスト』『ダンマが露わになるとき』など。

《これまで》

いまから30年前、第二次バチカン公会議で「教会再一致」と「諸宗教の対話」が決議された。以来、キリスト教と仏教の思想的な対話、東西霊性交流が真剣に進められて来た。

私は青年時代に洗礼を受け、その後世界の禅者鈴木大拙に教えを受けて禅匠（ゼン・マイステル）となったが、最近、キリスト教と仏教には何か共通の根拠があることが見えるようになった。それを語りたい。

承前（三）

ここで特に滝沢の「不可逆」という説が問題となった。まず阿部正雄が「不可逆」はキリスト教のことで、仏教は「可逆」だと主張し、本多正昭は「可逆即不可逆」を提唱し、八木誠一もこれに賛同した。しかし私は滝沢説をそのまま受けいれた。（『仏教とキリスト教～滝沢克己との対話を求めて～』三一書房1981年刊）。私は滝沢発言の不可分と不可同だけは認めるが、不可逆は認めないというような受け取り方を許さないもので、私がよく使う言葉で言えば、「一息に不可分・不可同・不可逆」として賛否を迫るものだと思うからである。それは、いわゆる分別論理の整合性だけで理詰めに読むと、滝沢の真意を見誤ると思うからである。私はいつしかそう思うようになった。文章にも、いわゆるカント型とヘーゲル型というような論理の型があるように思う。

以上のように、私は仏教徒だが、宗教の極致は聖書にいうインマヌエル（神、我らとともに存す）ということだと思う。ただし私は神は我々人間とは区別はできる（不可同）が、切り離すことはできない（不可分）ものだと思う。だから初めに神があって、天地を造り、人間を造った、そして世界の終わりに人間を裁くというような神を認めない。神は常に、即今・此処に、我らとともに存すのである。

そのことを禅匠黄檗は、仏も衆生もない、あるのは「一心」だけだという。仏（超個）というものも、衆生（個）というものも、迷った人間が描いた「相」にしかすぎないということである。神と人とは区別はできるが切り離すことはできない。不可分にして不可同である。神が先で人は後で、その間

の秩序は絶対に逆にはできない。これを不可逆という。キリスト教神学者滝沢克己は、これがインマヌエルという人間実存の原事実だと言った。私は仏教徒として滝沢のこの宗教哲学に深く共鳴した。

（四）

では、そうした「インマヌエル」―「神＝人」ないし「生仏一如」なる原事実は、いつどこで露わになるのか。黄檗は、先に言った「一心」をのちに「無心の心」と改めて言い直す。

聖パウロは、「キリストとともに十字架に死んで、キリストとともに復活する」という。そして、「もはや私は生きていない。キリストが私のうちに生きる」という。「死・復活」である。私はこれを宗教哲学的に、「自我（エゴ）に死んで自己（セルフ）に生きる」と言う。

パウロのいう「うちなるキリスト」こそ、パウロにとって「本来の自己」であった。キリストとともに死んでキリストとともに復活してこそ、パウロは自己の真の主体性を確立できたのである。禅者はこれを、この肉体のなかに生きて働く「無位の真人」という。そして、先の「インマヌエル」の事実を「法」の語で表し、「法が露わになる時」を大事にする。

では、法はいつ露わになるか。無我のときにのみ、法が露わになるのである。

それはまた、どこでかと重ねて問いたい。それは「坐禅」においてである。「坐禅」とは、「無我」の現成の場所であるからである。

かつてラサール神父は、「自分は神と一体になりたい。その神人合一の境地を得る方法論がカトリックの伝統では十全ではない。そのために、自分は仏教の坐禅にその神人合一の方法を学ぶのだ」といった。インドの正統宗教であるヒンドゥイズムの最高思想は「梵我一如」説だと言われる。これは自我原理であるアートマン（我）が、宇宙原理であるブラフマン（梵）に帰一するという、一種の神人合一論である。

ほとんどの仏教学者が、仏教の悟り（法が露わになる自覚）をヒンドゥ伝来の「梵我一如」論の線上で解釈するが、私はその学説には厳しく反対である。それは私は「法は無我のときに露わになる」のであって、ひっきょう「自我が大我になる」という「梵我一如」説とは、有我と無我と、方法がまったく逆であると考えるからである。「仏法には無我にて候」である。

さて、坐禅は悟りへの手段ではない。真の坐禅は無我の現成である。いわゆる絶対無の現成である。キリスト教に「神を見た者は死ぬ」という語があると聞く。そうした神（絶対無）が私において露わになる体験が坐禅である。坐禅において、我々の自我は絶対的に否定される。自我の死、そしてその死による真の「本来の自己」としての復活の経験が、見性（心眼を開いて自己の仏性を徹見する＝悟り）である。坐禅というが、それは何も「坐る」ことだけに限らない。伝統仏教語で言えば、禅定である。インドにおける禅定は「持戒・禅定・智慧」という三学の三分の一の禅定であるが、中国禅では「定慧一等・禅戒一如」で、いわば一分の一の禅である。だから、真の坐禅は、自我（エゴ）の大死による自我（セルフ）の大活でなければならない。それはインマヌエルの現成である。そこではじめて我々は一息の「神＝人」（無位の真人＝仏陀）となる。

先の神人（真人）を、哲学者滝沢克己はインマヌエルに、第一義のそれと第二義のそれを区別した。

第一義のインマヌエルは、すべての人の実存の根底に見られる恵みである。仏教者はこれを本覚門という。みずから自覚しようとすまいと、衆生は本来仏である。だが、衆生は通常この本来の事実に目覚めていない。

第二義のインマヌエルは、その本来底の自覚であり、現成である。仏教徒はこれを始覚門という。

イエス・キリストは、この第二義のインマヌエルの人間における典型的な実現である。道元のいう「本証の妙修」である。

滝沢におけるこの第一義と第二義の区別と統合の自覚はすばらしい。ただし、これまでのキリスト教は、これまでこの二つのインマヌエルの区別をイエスについて明析

に遂行しなかった。イエスは第二義の典型的に成就したひとりの人間なのに、イエスを第一義そのものと考えた。キリスト教の中で滝沢一人が初めてその誤りを脱し得た。

ともあれ、第一義のインマヌエルという木来底の「神＝人」という、人間実存の本分に随ってこそ、宗教的に「恥を知る」ということが実現できるのである。「神、我らとともに在ます」という生仏一如という本分に照らすときに初めて、人間は罪を知るのである。仏教徒のいう懺悔ということが、ここで真に実現できる。

悟りとはなにか。自我（エゴ）の否定による自己（セルフ）の肯定だと言った。自我がないとき、不思議にすべてが自己となる。仏教徒はこの体験を「物我一如」といい「自他不二」という。だから、汝の痛みが、即、我の痛みとなって、智慧がそのまま慈悲として働くのである。それはキリスト教徒が、「愛する者は神を知る。愛は神から出る」というのと、まったく一つである。

私はかつて、ドイツのザンクト・オッチリーエンのベネジクト大修道院を訪ねたとき、「初めに大悲があった」と言った。ヴォルフ院長は、すかさず「おおカルナー、そこであなたと私は一つになりました」と応じてくれた。仏教にいう「カルナー」はキリスト教にいう「アガペー」である。私はここに、仏教とキリスト教の共通の根拠があると信じる。（続く）

▲東京国際空港にて、ツアー参加者たち

▲トゥーランドットの舞台

トゥーランドット
〝TURANDOT〟
オペラ北京初公演

観劇ツアーに出発！

イタリアの作曲家プッチーニの名作歌劇「トゥーランドット」が、このほど北京の世紀劇場で開催された。

本誌は前号Vo1.17でこのオペラへのご招待ツアーを募集したが、懸賞当選者5名ならびに参加者5名は、11月15日東京国際空港を出発した。北京ツアー一行は16日の初演とレセプションパーティーに参加。さらに万里の長城、紫禁城見学など、思い思いの休日を過ごした。

LE MECENAT